

前田家本『承久記』の後鳥羽院と義時

— その文学性の評価のために —

大 津 雄 一

本稿は、拙稿、「慈光寺本『承久記』の文学性」(「軍記と語り物」17・昭56—3)及び、「前田家本『承久記』の「源氏志向」とその意味」(「古典遺産」31・昭55—12)を承けるものである。

さきに私は、慈光寺本『承久記』の文学性について論じ、慈光寺本は、後鳥羽院と北条義時を共に強烈な個性を持つ人物として形象し、この両者が積極的に敵しく対立するという明確な構図のもとに、一貫性と集中性をもって承久の変という歴史的状況を印象強く描き出す事に成功しており、従来の評価の如く文学的価値のない作品とするのは当たらないと結論した。またその際、これに比べた時の流布本の文学的な失敗も指摘し、それが、慈光寺本の如く後鳥羽院と北条義時とのいわば強者としての形象に意を注がず、従って両者の積極的・直接的対峙がみられず、対立の構図を弱体化し一貫性と集中性の拠り所を失った事に起因するとした。また、この流布本に対する指摘は、基本的に前田家本にも共通するものであるが、前田家本には流布本、勿論慈光寺本にもない特色があると付言した。本稿はそれを指摘し、前田家本『承久記』

の文学的評価を試みる事を目的として成ったものである。(傍線筆者、以下同)

次は、前田家本と流布本の結文である。(傍線筆者、以下同)

〔前田家本〕

〔流布本〕

抑々承久いかなる年号ぞや。
玉体ことく西・北の風に
没し卿相みな東夷の鋒にあた
る。天照太神・正八幡の御は
からひなり。王法此時かたぶ
き、東国天下を行べき由緒に
てや有つらん。御謀反の企の
はじめ、御夢に黒き犬御身を
飛越ると御覧じけるとぞ承
る。かく院のはてさせ給しか
ども、四条院の御末たえしか

承久三年如何ナル年ナレバ、
三院・二官、遠嶋へ趣セマシ
公卿・官軍、死罪・流
刑ニ逢ヌラン。本朝如何ナル
所ナレバ、恩ヲ知臣モナク、
耻ヲ思フ兵モ無ルラン。日本
国ノ帝位ハ伊勢天照太神・八
幡大菩薩ノ御計ヒト申ナガ
ラ、賢王逆臣ヲ用ヒテモ難
保、賢臣惡王ニ仕ヘテモ治シ
ガタシ。一人怒時ハ罪ナキ者

ば、後嵯峨院に御位まいりて
後院と申。土御門院の御子な
り。御うらみは有ながら、配
所にむかはせ給き。此御志を
神慮もうけしめ給ひけるに
や。御末めでたくして、今の
世に至るまで此院の御末かた
じけなし。承久三年の秋にこ
そ物の哀をとめしか。

ヲモ罰シ給フ。一人喜時ハ忠
ナキ者ヲモ賞シ給ニヤ。サレ
バ、天是ニクミシ不レ給。四海
ニ宣旨ヲ被レ下、諸国ヘ勅使
ヲ遣ハセ共、随奉ル者モナシ
カ、リシカバ、関東ノ大勢、時
房・泰時・義村・信光・長清
等ヲ大将トシテ、數万ノ軍兵、
東海道・東山道・北陸道三ノ
道ヨリ賣上リケレバ、靡カヌ
草木モ無リケリ。

まず、この冒頭の部分に注目したい。ここで流布本はAの如く、承久三年という年号を問題にしているが、前田家本はAの如く、承久という年号を問題にしている。これには如何様な意味があるのだろうか。

記録類によると、建保七年四月十二日に改元の命が下り、十六案の中から大藏卿為長の勘えた「承久」が採られた事、そしてそれが『詩緯』の一節に拠る事がわかる。その一節とは、「周起自后稷 歷世相承久」であると考えられている。その様な嘉例に拠る、「承け継ぎ久しい」という意味の「承久」という年号のもとで、「玉体ことく西・北の風に没し、卿相みな東夷の鋒にあたる。」という事態と成ったのである。年号と、それに反する現実との間の大きなギャップを、前田家本は、「抑々承久いかなる年号ぞや」という一文の中で言わんとしているのである。

ところで実は、このAの一文に対しては、伏線が張られている

のである。それは、次の様な前田家本の独自文(3)に見出される。凡、院いかにしても関東を亡さんと思召けることあらは也。京童を集めさせ給て、ぎじちやうとうとたへとて、物を給はりければ、さなきだにすぐるごと云に、ぎじちやうとうとぞ申ける。是は義時打頭と云文字のひどき也。又年号を承久と付たるも深き心あり。其上南都・北嶺に仰て、義時を呪阻し給ふ。

ここでは、後鳥羽院が、その義時打倒へ向けての行動の一環として、年号を「承久」と付けたと記されている。その「深き心」とは、鎌倉幕府を滅ぼして幕府出現以前の国王(院)専制の政治体制を再興して承け継ぎ、これを久しく続けて行こうという心である。この様な意味を持つ、「又年号を承久と付たるも深き心あり」という一文を、結文冒頭の、「抑々承久いかなる年号ぞや」という一文と対応させて見る時、前田家本が極めて意図的な操作をしている事を知るのである。討幕と国王専制政治の復活を願って後鳥羽院は「承久」と年号を付けたが、その結果は、彼の意図とは全く逆のものとなった。自身さらには皇子達も配流の地に没し、近臣達は武士達の手で処刑されたのである。そこには乱の前後に生じた大きなギャップが強く浮かびあがって来る。

この様に前田家本はこの一文の中で、年号の意味するところと現実とのギャップ、その年号を付けた後鳥羽院の意図と現実とのギャップという二つのギャップを用いて、流布本以上に後鳥羽院の敗北の事実を強調しているのである。

先ほど意図的な操作といったが、これを単なる偶然と考えない

のは、実は同様なパターンをBの一文に見るからである。この一文、流布本ではBの如く、天照太神・八幡大菩薩のはからいの対象は、「日本国ノ帝位」である。一方、前田家本のはからいの対象は、「玉体ことく西・北の風に没し、卿相みな東夷の鋒にあたる。」という敗北の事実である。流布本は、日本国の帝位は両神のはからいである。しかし如何に「御計ヒト申ナガラ」と続けて、徳治主義的立場から後鳥羽院を批判し、その敗因を求めているのであって、彼の敗北までも両神のはからいとするわけではない。前田家はこの敗北が神々の意志によるものであると、動かし難い事実として強く提示しているのである。

さて、この一文にもAと同様に伏線が張られている。それは、後鳥羽院の義時追討の決意を示す、やはり前田家本の独自文中に見出される。

抑右大将頼朝を鎌倉殿となす事、後白河法皇の御許なり。卒土の王土は皆是朕がはからひ也。然るを義時、過分の所存に任して宣旨を違背申こそ不思議なれ。天照太神・正八幡もいかでか御力を合せ給はざるべき。

この一文をBの一文と対応させて見る時、後鳥羽院の敗北は、「いかでか御力を合せ給はざるべき」と頼んだ他ならぬその「天照太神・正八幡の御はからひ」ということになるのであり、この一文に於ても、神意のもとにその敗北を断罪して強調するのみならず、後鳥羽院の意図と現実とのギャップを以って、後鳥羽院の敗北の事実を殊更に印象付けようとしているのである。

このBの前文との対応については、そこに古代的權威の敗北の

姿の戯画化があるとする指摘がある⁽⁴⁾、またそれに対する異議もあるが、Bだけでなく、筆者が指摘した如くAの一文における前文との呼応にも、同様な方法で後鳥羽院を戯画化する事が認められるのであり、それが古代的權威までも戯画化しているかは議論の余地もあるが、確かに前田家本には、後鳥羽院に対するシニカルな見方があるといえよう。

以上、この結文からいえる事は、前田家本が伏線を張るという操作をしてまで、後鳥羽院を揶揄する如き視点をもって、その敗北を強調しているという事実である。前田家本の後鳥羽院形象の特質は、ここに端的に示されていると思うのだが、更に後鳥羽院配流に関する一連の記事を見てみたい。

八日御出家有べきよし、六はらより申けるに、御ぐしおろさせ給ふ。太上天皇の玉体、忽に變じて無下の新発とならせ給ふ。(中略)十三日に六はらより時氏・時盛参て、隠岐国へ遷し奉るべきよしを申。御出家の上は、流罪まではあらじと思召けるに、遠き嶋ときこしめされて、東西をうしなはせ給ふぞ忝き。撰錄は近衛殿にてわたらせ給ひけり。君しがらみとなりて留させ給へとあそはされける御書の奥に、

墨染の袖に情をかけよかし涙ばかりはすてもこそそれ

とあそはされたりければ、撰政の御威法も君の君にてわたらせ給時のこと也。一院の御供には、亀菊殿・聖一人・医師一人・出羽前司弘房・武蔵権ノ守清範とぞきこえし。去る平家の乱世には、後白河院、鳥羽院に遷らせ給しをこそ、世の不思議とは申ならはしに、今は遠き国へながれさせ給ふ。先

代にも超たること共也。水無瀬殿過させ給ふとて、せめては爰に置ばやとおぼしめさるゝも理也。(中略) ^E彼保元のむかし、新院の御軍破れて、讃岐国へ遷されさせ給しも、爰を御とをり有けるとこそきけ。御身の上とはしらざりし物をとおぼしめす。それは王位を論じ位を望給ふ御事也。是はされば何事ぞと思召ける。(中略) ^Fかくて日数重りなれば、隠岐国へぞつかせ給ふ。是なん御所とて入奉るを御覧すれば、あさましげなる筈ぶきの薦の天井竹の簀子也。をのづから障子の絵などにかかる住めかきたるを御覧せしより外は、いつか御目にも懸るべき。唯是は生をかへたるかと思召すも忝し。

我こそは新嶋守よおきの海のあらき浪風心してふけ

^G都に定家・家隆・有家・雅経さしもの歌仙たち、此御歌の有様を伝承て、唯もだへこがれて泣悲しみ給へ共、罪に恐れて御返事をも申されず。され共正三位家隆便宜に付て恐れ／＼御歌の御返事を申されけり。

ねざめしてきかぬを聞てかなしきはあら磯波の暁のこゑ

長文の引用になったが、傍線を施した文章の内、**B・C・D・E・F・G**は前田家本の全くの独自文である。

まず**A**では、後鳥羽院が、敗北の結果、太上天皇という至上の「玉体」から「無下の新発」となったと記し、承久の変前後に生じた大きな落差を提示する。流布本の該当部分の「忽ニ花ノ御姿ノ替ラセ給ヒタルヲ」という表現に比べれば、より強くその敗北の姿を印象付けるものになっている。次の**B**では、「無下の新発」に成っただけでは済まず、追い討ちをかける様に思いもよらぬ遠

島への流罪を告げられ周章狼狽する姿が描かれる。**C**では、せめて流罪は免れ様と摂政に救済を求めるが、それも「君」ではなく「無下の新発」と成った今ではかなわない事だとする。**D**では、その遠島への配流が、「世の不思議」といわれた後白河院の鳥羽殿幽閉にも過ぎた事だとする。**E**では、保元の乱の際の崇徳院の敗北と今回の敗北とを引き比べて、そのみじめさを後鳥羽自身の思いとして記している。即ち崇徳院の場合は位争いであり、敵は時の天皇であった。しかるに今回の敵北条義時は、院にとっては全く下位の臣にすぎないのである。しかも、それに敗れたのである。「されば、これは何事ぞ」という一文には、その様な意味が込められているのである。**F**では、流布本では、「海水岸ヲ洗ヒ大風木ヲ渡事尤烈シカリケレハ」と周囲の様子を記すだけだが、前田家本は佗しい住居の様子を記した上に、争乱前には給でしか見た事のない様な家を眼前にした後鳥羽院の心中を「唯是は生をかへたるか」と描き出している。そして**G**では、争乱前後鳥羽院を取り巻いていた歌人達が、配流後は罪が及ぶのを恐れて返歌もできず、家隆のみが「恐れ／＼」(この表現も流布本にはない)返歌をしたと、乱後の院の孤独な状況を描き出す。

以上見て来た如く、**A**、及び**B**以下の独自文から言える事は、前田家本が、承久の変の前と後とに生じた、後鳥羽院の地位や住居や対人関係などにおける大きな落差・変化を示す事により、或いは前例と引き比べる事により、繰り返しその敗北の姿を印象付けている事である。

前田家本は、記録性が強く物語性が希薄であることがいわれて

(6) いる。事実、乱後処理に関する場面に限っても、例えば、流布本

が言葉未尽して記す勢多伽丸の処刑をめぐる哀話も粗筋的記述し
がなく、量的には流布本の四分の一程度であるし、六人の公卿の
処刑の場面も流布本ほど物語としてのふくらみを持たず、量的に
は三分の一程度である。順徳院や土御門院の配流の記事にも同様
な傾向が認められる。この様な一連の乱後処理の話の中で、後鳥
羽院に關してのみ前述の如く多量の独自文が見出せる事には注意
してしかるべきであり、そこに前田家本の意図を認めても誤りでは
あるまい。ただそれを、単に悲劇性を高めて物語にふくらみを
持たせようとするものと考えるのは、前述した如き前田家本の性
格からして考えにくいし、何故後鳥羽院の場合に限ってその様な
意図が発揮されるかの十分な説明が得られない。また、問題にし
た独自文にも院に対する同情的な筆致は見られず、BやEにはむ
しろ逆の印象を与えるものがある。筆者は、前田家本が多量の独
自文を付加した意図は、その内容からみて、後鳥羽院の敗者とし
ての形象にあったと考える。

さて、更に前田家本の後鳥羽院形象を探ってみたい。以下の四
例は、つとに先字により問題にされて来たものだが、重要な意味
を持つので、ここでも確認しておきたい。尾張における緒戦での
敗北の報に接した後鳥羽院の様子⁽⁷⁾が次の如く記されている。

(A) 君も臣もあはてさはがせ給き。唯今都に敵打入たるやうにひ
しめきけり。一院は合戦の習、一方はかならず負也。されば
とて、矢も射ぬことやはある。今は世はかうにこそ。怒の軍
せんよりは、山門に移て三千人の大衆を頼て、吾は相綺はぬ

よしを、関東へ怠せんとぞ被仰ける。

次は、宇治勢多の合戦に敗れた武士達が院の御所四辻殿へ帰参
して、「最後の御供仕候はん」と申し入れた時の言動である。

(B) 一院 いか成ぬとも思食れぬ所へ、四人参りければ、弥々
さはがせ給て、我は武士向はぶ、手を合て命ばかりをば乞ん
とおぼしめせども、汝等参籠て防戦ならば、中々悪かりな
ん。何方へも落行候へ。さしもの奉公、空くなしつるこそ不
便なれども、今は力及ばず、御所の近隣に在べからずと仰出
されければ、各々心のうち、云も中々をろか也。

(C) 十九日巳ノ刻、泰時雲霞のごとくの勢にて、上河原より打
立、四辻殿の院御所へよすと聞えけり。一院、東西をうしな
ひ給ふ。月卿・雲客前後を忘れてあはてさはぐ。責ての御こ
とに院宣を泰時に遣はされけり。

秀康朝臣・胤義已下徒黨可令追討之由、宣下既畢。又停
止先宣旨、解却輩可令還任之由、同被宣下訖。凡天下之
事、於今者雖不_レ及_二御口入_一、御存知趣爭不_レ仰知乎、
就凶徒浮言、既及_二此御沙汰_一、後悔不_レ能左右。但天災之時
至歟。抑亦惡魔之結搆歟。誠勿論之次第也。於自今以後、者
携武勇、輩者不_レ可召仕。又不_レ裏家好武藝者、永可_レ被
停止也。如此故自然及御大事、由、有御覺知者也。悔
先非被_レ仰也。御氣色如此。仍執達如件。

六月十五日

權中納言定高

武藏守殿

諾こそ被_レ避けれ。

(D) 去程に武蔵守、しづかに院参して、謀反を進め申されつらん
雲客をめし給らんと申されければ、急ぎ交名をしるし出させ
まし／＼けるぞ浅ましき。(園点筆者)

(A) に該当する部分、流布本では「一院何ト思召分タル御事共ナ
ク」とあり、(B) は「武士共是ヨリ何方ヘモ落行トテ門ヲモ開カデ
不被_レ入ケレバ」とあり、共に簡単に記すだけである。(C) は前田
家本独自のもの、(D) は、流布本では、院が下家司をして泰時に、
「ナ参ソ、張本ニ於ハ名ヲ註シ出サンケルゾ」と伝えさせる形を
とっている。

ここで前田家本が、流布本以上の情熱をもって描き出している
のは、敗北という思いもよらない事態に氣も動転して、自分に忠
勤を励んだ近臣や武士達に責任を転嫁する事により、自己の保身
を計ろうと腐心する、利己的で小心な敗者としての後鳥羽院であ
る。

ところで、兵藤裕己氏は、流布本や前田家本『承久記』が『保
元物語』に大きな影響を受けて成立した事を論証されたが、その
中で、(A)・(B)二つの場面についても言及されている。まず(A)は、
『保元物語』での家弘・光弘の崇徳院への敗戦報告の場面との類
似性が指摘されている。ただ、ここで問題にしたいのは、『保元
物語』における崇徳院は、「今度の命計たすけまいらせよ」とい
う言葉に見られる如く、その氣弱な面は描き出されているが、前
田家本『承久記』における後鳥羽院の如く、術策を弄して責任を

免れようとする浅ましきまでは描き出されていないという事実で
ある。また、(B)の後鳥羽院の言葉も、『保元物語』で崇徳院が敗
北後も付き従う武士達に対していった、「志は誠にさることなれ
共、我身計こそ、縦敵襲来とも、手を合せ、降をこはむに、など
か助まいらせざるべき。汝等つきそひては、防戦はむずらん。中
／＼あしかりぬとおぼゆるぞ」という言葉を書承的に引いている
事が指摘されている。しかし、両作品では意味するところが全く
違う事を注目しなければならぬ。即ち崇徳院の言葉は、その前
後から判断して、何処までも彼を見捨ずに従って行こうとする武
士達を、もはや詮のない事であるから落ち行く様に促し説得する
為の一種の方便である事が明らかであり、武士達は再三の説得に
涙ながらに落ちて行つたと記してある。いわば相手の立場を思い
やうての発言である。しかし後鳥羽院の場合、考えているのは自
己の保身のみであり、思いやりなどというものではない。この様
に、前田家本『承久記』は、『保元物語』に拠りながらも、その
独自の視点を打ち出しているのであり、そこにこそ注目したいの
である。

前田家本の後鳥羽院が、慈光寺本の如く強者として形象されて
いない事は流布本と同様であるので、ここでは繰り返さなかった
が、前田家本ではその上に、今まで結文・配流の叙述・敗北後の
言動に見て来た如く、敗者としての側面が強く打ち出されてお
り、しかも小心卑劣な弱者として、一方的に矮小化されていると
いえよう。いうならば、前田家本の後鳥羽院は、まさに敗者とし
てのみ存在しているのである。

さて問題は、この様な後鳥羽院形象が、前田家本の文学性にとってプラスであったかどうかという事であるが、これに答える為には、もう一人の主役北条義時について考えてみなければなるまい。

二

前田家本の北条義時像は、流布本のそれと基本的には共通している¹⁰ので、別稿での指摘を確認しておきたい。

慈光寺本の義時は、強い意志力と個性を持ち、御家人達を統率して積極的の後鳥羽院に挑んで行く人物であり、野心家的側面すら持つ、いわば強者として形象されている。これに対して流布本では、その人物像は理想化され、その結果後鳥羽院への対処も受動的となる。例えば、院が讒言を容れて自分を攻めるので仕方なくこれに應對するという形をとるといように、慈光寺本の如く意志的な強者として形象されず、その作品中に占める存在感は、彼の理想化が進んだ分だけ希薄になっている。

以上の如き流布本の義時像は、そのまま前田家本にもあてはまるのだが、前田家本では更にこの傾向が助長されているのではないかと思われる。別稿¹¹で私は、前田家本の源氏、特に鎌倉三代將軍に対する特別な意識、いわば「源氏志向」を指摘し、それが義時の形象に深く係わっていると論じて、すでにこの事に言及している。今、紙幅の都合上その要点だけを確認すれば、その登場の際の一文に、前田家本にのみ、「二位殿の御弟、実朝の御伯父なり」とあるところにすでに端的に知られる如く、義時の背後には

常に三代將軍が居り、彼の存在は三代將軍との繋がりにより初めて保証されるという構造になっている。そしてその際「日本副將軍」・「代々將軍の後見」というような政治上の繋がりでではなく、三代將軍との血縁という繋がりが重視されるのである。承久の変勃発時の武士達の去就も、義時を三代將軍の後継者と認めるかどうかで決せられたのであるが、その際判断の基準となつたのは、彼の實力の有無ではなく、彼の三代將軍との強い繋がりで、特に「三代將軍の御形見」という血の繋がりを三代將軍の權威を継承できる程のものとして認めるかどうかであった。前田家本において承久の変の結果を左右したのは、三代將軍の權威であると言ええるのである。

ともかく、前田家本の義時は、全く三代將軍に依存しているのである。この様な義時の形象は、結果的に流布本以上に義時の立場を正当化し、彼を理想化した。しかし義時の存在が三代將軍との緊密な繋がりにより初めて可能であるとした事は、作品中一方の主役を動めねばならない彼の主体性・独自性を弱めている。その結果、同様に義時の強者としての形象に意を注がない流布本以上に、無色無臭の人物となり、慈光寺本の如く強い個性は感じさせず、作品中に占める存在感もはなはだ希薄なものになっている。

三

さてここでは、何故前田家本の後鳥羽院・義時が前述の如く形象されたかを考えたい。

もう一度、さきの結文を見ていただきたい。ここで流布本はCの如く、後鳥羽院を徳治主義的立場から批判してその誤りを指摘し、そこに国王の敗北という前代未聞の事態が生じた原因がある、いわば承久の変の結果に対する理由付けを行っている。一方前田家本は、Cの「王法此時かたぶき、東国天下を行べき由緒にてや有つらん」という一文に見られる如く、この争乱を王法の衰亡・武家政治の確立の契機としてとらえ、承久の変の結果に対する歴史的意義付けを行っている。前述の如く、これ以前の結文の部分で院方の敗北を殊更強調したのも、この意義付けをより明瞭にする為であると考えられる。

この様な前田家本の視点は、他にも散見される。例えば、これは流布本にも同様な一文が見られるが、冒頭いわゆる帝紀形式で後鳥羽院を紹介した後、

王法つきはてさせ給ひ、人臣世を背し故をいかにとたづねるに、地頭・領家の相論とぞ聞えける。

と、承久の変を記し始めるのである。承久の変の結果を王法の衰亡の基とした結文と同じ認識がここにはある。

また、院方の武將山田次郎重忠が後鳥羽院に戦法を進言する中に、

此義あしく候はゞ、宇治勢多を堅られて、人馬の足をつからかして、閑に宮古にて御合戦有て、若王法つきさせ給はゞ、各々陣頭にて腹を切名をとめ、骸をうづむべし。

という言葉がある。ここで院方の敗北を「王法つきさせ給はゞ」という言辭で表現している事は注意してよいだろう。これは前田

家本の独自文である。

さらに、これも前田家本の独自文だが、院方に加わっていた南都北嶺の大衆が、敗北を知って落ちて行く時の様子を次の如く記している。

当日、大衆、高声に念仏申て、哀なりける王法かなと高らかに口ずさび、泣々本山々々に帰けり。

ここで前田家本は、大衆の口を借りて、この敗北が王法の衰亡を意味する事を高らかに口ずさんでいるといえよう。

以上の如く、前田家本に王法の衰亡を殊更強調する言辭が見られるのは、結文に見られる歴史的意義付けの姿勢の反映と考える事ができよう。

そして、この様に、承久の変の歴史的意義を考え、王法の衰亡の契機ととらえる前田家本にとって、後鳥羽院はまさに敗者である事において意味がある。王法の衰亡の具現者として存在の意義がある。前田家本が執拗に後鳥羽院を敗者・弱者として形容した原因は、ここにあるのではないだろうか。

では、もう一步論を進めて、前述の如き歴史的意義付けを可能にしたものは何なのであろうか。それは、その成立事情にあるのではないかと思われる。

前田家本の成立事情については、まず原井曄氏の論がある。氏は、前田家本に「足利びいき」が顕著に見られる事から、その成立時期を、足利幕府開設からそう遠くない前後と論じ、作者は足利氏の立場に立つものであると指摘した。また松林靖明氏も、かつて五十嵐梅三郎氏が指摘した『梅松論』との本文上の近似を

認め、更に、後鳥羽院の治政に対する批判や北条氏に対する称揚などに共通の姿勢が見られる事も指摘し、原井氏の説を確認している。⁽¹⁵⁾ また別に兵藤裕己氏も『保元物語』との交渉関係から、「語り」によって成熟する前期軍記物の一応の完成期以降、つまり南北朝期以降」の成立とした。⁽¹⁶⁾ 筆者も別稿に於て、前田家本に見られる「源氏志向」を指摘し、それが原井氏の指摘した「足利びいき」と同根であろうと論じ、原井氏の説を確認した。即ち前田家本は、足利政権下に足利氏の立場にある者の手によって成立したと考えられるのである。⁽¹⁸⁾

別稿で指摘した如く、慈光寺本はそれ以前の国王兵乱史という歴史と照らし合わせて、その特異性を指摘した。しかし前田家本の如く、承久の変を王法の衰亡・武家政治確立の契機として歴史的に意義付ける事はできなかった。前田家本にそれが可能であったのは、乱後早く成立したと考えられる慈光寺本と違って、承久の変後はほぼ百年間続いた鎌倉主導の政治の有り様を確認しうる時期の成立であった事によると思われる。しかもそれが、松林氏が指摘した如く『増鏡』・『神皇正統記』・『梅松論』等が、各々の立場から承久の変の位置付けを試みた、「いわば政治の季節」であった事とも、確かに無関係ではあるまいと思う。

一方の北条義時についていえば、その存在感の希薄さが前田家本の「源氏志向」に拠るものであり、その「源氏志向」が前田家本が足利氏の立場にある者の手に成った故に生じたものである事を考える時、義時の形象にも作者（改作者）の立場というその成立事情が係わっている事を知るのであり、前田家本では、作品の

成立事情がその内質に大きな影響を与えたといえる。しかしそれは、前田家本の文学性にとっては歓迎すべからざるものであった。

四

慈光寺本『承久記』の文学性を支えたものは、骨太の「対立の構図」であった。後鳥羽院と北条義時を強者として形象し、その積極的対立を軸として緊張感を持って描き出したところにその成功があった。その結果の重大さに比して、乱自体はあつけないものであった承久の変を素材として作品を成立させる為には、その様な方法が必要であつたと思う。流布本は両者を強者として形象する事なく、この「対立の構図」を弱体化した為に、散漫な作品と成ってしまった。前田家本では、後鳥羽院は矮小化され敗者・弱者として存在し、北条義時の存在感は更に希薄にされた。その結果「対立の構図」は、弱体化を越えて全く崩壊したのである。そしてその原因としては、前述した如くその成立事情が考えられる事も確認しておきたい。

前田家本は、歴史的意義付けを導入した。その事の一つの思想性の確得として評価して然るべきであろう。ところが、その歴史的意義を強く享受者に訴える為に、せひとも必要であつた「対立の構図」を崩壊せしめた故に、承久の変という歴史の状況が鮮明なものにならず、従つてその歴史的意義付けも説得力を持たないものである。より具体的にいえば、前述の如き両者の形象は、勝者と敗者を明確に色分けするには力があつた。しかし、その勝敗に至

るまでの過程が享受者に興味を抱かせつつ十分に描き込まれ、文学的感動を呼び起こすものがなければ、それは単なる事実の提示に過ぎず、承久の変を強く印象付けるような、何の文学的感銘も与えないのである。

結局、前田家本『承久記』は、その文学性において、慈光寺本『承久記』に一步も二歩も譲らざるを得ないのである。

注1 「慈光寺本『承久記』の文学性」(『軍記と語り物』昭56—

3)

2 元和四年古活字本(国立国会図書館蔵)を用いた。

3 勿論、前田家本系の本文である「承久兵乱記」にはある。

(以下同)

4 杉本圭三郎氏「承久の乱と文学」(『日本文学誌要』昭40—

6)

5 桐原徳重氏「承久記の文学性試論」(『国語と国文学』昭47

—9)・松林靖明氏「前田家本『承久記』の一面面(下)」(『青須我波良』昭53—11)参照。ところで、流布本は巻頭部分で、

「賢王・聖主ノ直ナル御政ニ背キ、横シマニ武芸ヲ好マセ給フ」と、後鳥羽院の政治を否定し、武芸を好んだ事を「横シ

マ」であると批判する。そして、呉王・楚王の故事を引いて重ねて批判する。また、結文でも徳治主義的立場から批判する。

一方、前田家本の巻頭部分の該当箇所は、「賢王・聖主の道を御学ありけり」とあって、むしろ肯定的である。また

武を好んだ事を横しまであるとせず、むしろ、「はやわざ、水練に至まで淵源をきはめます」と肯定的に評価するところがある。

呉王・楚王の故事もなく、結文にも流布本の如き批判はない。つまり、流布本の方が批判的に後鳥羽院を形象しているが、それは前田家本の如き人間性の戯画化とは異

質である。逆にいえば、前田家本にはその様な批判精神がないわけ、やはり戯画化というのがふさわしい。

6 松林靖明氏、新撰日本古典文庫1『承久記』(昭49—1)解説

7 特に、松林靖明氏「前田家本『承久記』の一面面(上)」(『青須我波良』昭52—11)に詳しい。

8 「承久記改竄本系の成立と保元物語」(『軍記と語り物』昭53—1)

9 金刀比羅本(日本古典文学大系『保元物語・平治物語』)による。

10 注1拙稿

11 前田家本『承久記』の「源氏志向」とその意味」(『古典遺産』昭55—12)

12 「結果的」と言ったのは、前田家本で、義時が三代將軍と結びついたのは、彼の理想化を目指したからではなく、あくまで三代將軍の存在の拡大化を目指した結果だと考えるからである。それは「源氏志向」が義時に関する以外にも見出せる事、一方に「足利びいき」という事実があるという理由からである。

13 「前田本承久記の作者の立場と成立年代」(『歴史教育』昭42—12)

14 「承久兵乱記の成立に就いて」(『史学雑誌』昭15—6)

15 注5松林氏論文

16 注8兵藤氏論文

17 注11拙稿

18 「慈光寺本『承久記』の特質—その構想を中心として—」(『古典遺産』昭51—7)

19 注5松林氏論文

〔付記〕本稿は、軍記物談話会第一七五回例会での発表を骨子として、席上御教示を賜った会員諸氏に感謝申し上げます。